

尾高煌之助／斎藤 修／深尾京司監修
久保庭眞彰／雲 和広／志田仁完編著

『アジア長期経済統計 10 ロシア』

東洋経済新報社 2020.8 xxiv + 500 ページ

堀江典生

(富山大学サステイナビリティ国際研究センター教授)

E-mail: horie@eco.u-toyama.ac.jp

1995 年から始まった一橋大学経済研究所の「アジア長期経済統計」プロジェクトは、アジアならびにその周辺諸国の国民経済計算の概念枠組みに則った年次時系列加工統計を作成して一般公開することを狙いとしている。その成果は、最新刊としての本書以外にも台湾、中国、韓国・北朝鮮がすでに刊行され、最終的にはベトナム、タイ、インド・パキスタン・バングラディッシュ、フィリピン、インドネシア、トルコ・エジプト、中央アジア、日本を加えた 12 巻で完結するシリーズとなる。非常に息の長い、膨大な労力が注がれているプロジェクトである。本書は、二部構成で、第 I 部は記述編とされ、序章と 9 つの章からなり、第 II 部は統計編となっている。これだけでも大著であるが、末尾に CD-ROM が付されていて、統計表に加え、紙面に収録できなかった統計表や補論が収められている。ロシア地域研究に関わる読者のひとりとして、自らの関心事に惹きつけながら、本書の意義や各章のおもしろさを考えてみたい。

序章は、本書の目的と意義や帝政期、ソ連期、現代を跨ぐ長期経済統計の推計にとって避けて通れない領土領域の変遷を示すとともに、本書各章の推計結果をもとにしたロシアの長期経済発展の動向を分析例として提示している。また、第 1 章では、ロシアの統計制度の特徴と変遷がおおまかに論じられ、細部を見る前に、成果の全体像を把握でき、すっきりと各章に入っていくことができる。

人口統計は、人口、出生、死亡の三本の基本線を描く。それゆえ、本書第 II 部統計編においても第 2 章の人口については、統計表はひとつだけである。単純そうであるが、そうではない。現代ロシアの領土領域に合わせて帝政期にまでさかのぼって三本の線を描くには、領土変更、行政区画変更を加味したり、そもそも統計がない期間の統計の欠落、コーカサス、シベリア、極東などロシアの辺境における統計の欠損、内戦や大戦や粛清・飢饉による死亡者数の秘匿などによる統計の欠損を補ったりする職人技の作業を伴っている。それらは、研究室に座して技術的に解決するだけでなく、アーカイブ資料を探し出し、その端切れから欠損を埋めていく文化財修復士のような作業でもある。1867 年から 2002 年までのロシアの人口動態を表す統計表 2.4.1 は、その作業の結実である。その用心深い丹念な仕事ぶりとは熱量は、読み手にとっては閉口するところでもあるが、本書において最も脚注が多いことから窺えよう。

我が国でロシアの労働問題・労働市場研究を行う者は、必ず大津定美の『現代ソ連の労働市場』（日本評論社 1988 年）に学ぶ。そこには、本書でも論じられるソ連独特の労働概念が説明されている。現代ロシアにおいて、それらがどのように引き継がれ、どのように国際的な基準に沿った統計へと転換していったのかについて手引きをしてくれる研究は少ない。第 3 章の労働は、どの時代を研究する者にとっても、労働統計理解の不可欠な導き手となってくれる。ただ、ソ連の労働統計と現代ロシアの労働統計をつなぎ、長期労働統計として提示することを目的とするため、経済活動人口、就業者、失業者といった基本的な労働概念に関わる部分だけの分析となっている。失業統計が現代ロシアでしか見いだせないこともあり、せっかく失業統計まで組み込んだのなら、ロシア独特の非正規雇用などにも幅を広げてよかったのではないかと現代的な視点からは感じる。ソ連期初期からの一貫した農業就労者の減少傾向や 1970 年代を境とした工業部門就労者の減少は、ソ連と現代ロシアをつなぎ

合わせたからこそ観察できるおもしろさである。農業就労者は、統計表 3.3.5 では、コルホーズ員は一貫した減少でありながら、農業部門では 1985 年までは増加傾向であったことも興味深く、第 4 章で言及されているように 1930 年代から持続的に減少するコルホーズに対し持続的に拡大傾向にあったソフホーズの実態と合わせて考えたいところである。本章の推計結果を眺めるだけでソ連から現代ロシアへの変化に関する様々な仮説が思い浮かび、見ていて楽しい。

第 4 章の農業は、帝政期およびソ連期のデータ整備や推計結果により第 9 章の GDP 推計に貢献する地道な研究である。帝政期、ソ連期の知見の厚みと生産統計に関する独自性のある推計の提示が本章の特色であり、ソ連崩壊後の現代ロシア農業の生産低下が、第二次世界大戦による生産低下に次ぐ規模であったとする指摘は、長期統計研究ならではの指摘であり、おもしろい。多くの研究者が、生産低下要因としてのソ連崩壊以降の農地放棄地の拡大に着目してきた。播種面積だけでなく、農業用地面積、農地面積、耕地面積も、土地生産性を考える意味でも知りたいところである。とはいえ、ないものねだりの指摘は本章の評価を左右するものではない。

第 5 章の鉱工業は、帝政期、ソ連期、そして、現代と 3 つの時期をそれぞれ個別に生産と労働に着目し分析が行われ、特に、帝政期とソ連期における鉱工業生産指数の推定が提示されている。帝政期、ソ連期にはそれぞれ厚い研究蓄積があり、著者はそれらを踏まえて自らの新たな推計結果を提示することで、学術的貢献をしている。ただ、通史として考察する独立した節がないのが残念である。個人的に興味深かったのは、ソ連期の工業生産要員数の詳細が示されている統計表 5.2.6 である。この表は、ソ連とロシア共和国の両方の工業生産要員数が示され、両領域の比率が示されている。著者は、ロシア共和国以外のソ連地域における工業化進展のテンポが、ロシア共和国を上回っていたと評価している。このことは、同時に、鉱工業が現在のロシア以外の旧ソ連諸国へと外延的に展開され、そうした地域にロシアから技術者が派遣されるとともに生産要員が教育され確保されていった過程を想起させ、おもしろい。

第 6 章の通貨と金融は、長期経済統計として帝政期、ソ連期、そして現代を通じて共通した特徴を見いだすことが、資料の制約上、制度比較上、困難であることを断ったうえで、各期の通貨金融制度の特徴と各期の通貨金融統計の特徴を論じている。第 7 章の財政もまた、帝政期、ソ連期、現代の領域の違い、国家財政にとって不可欠な収入・支出項目の欠如、地方財政を含まないソ連期の特徴などから、3 つの時期を比較できないとしている。これらの章は、ロシアの長期統計の整備の難しさを如実に表していると言えよう。それでも、第 7 章では、最後に若干の分析としながらも、三つの時期の財政の特徴を総括してくれている。そもそもソ連期に法人税というものが存在しないものの、付録の CD-ROM に所収されている補論 3 をみると、3 つの時期の比較が可能ないように、それぞれの歳入項目が整理され、法人税に相当する区分を示してくれている。本文中の説明のように、企業の利潤からの支払が主な歳入のようであるが、歳入項目 111 は「企業・組織からの税金」とされており、中身をみれば、コルホーズや消費共同組合の支払であることがわかる。歳入項目 110 の「機械トラクター・ステーション収入」も合わせて、農民から搾り取る税金であったように見えて、おもしろい。また、ソ連期の 6 割ほどの期間で財政赤字であったことなど、ソ連経済が経済発展のために非常に無理をしていたことも、興味深い。

第 8 章の貿易は、貿易統計商品分類を現代ロシアに合わせるというのではなく、帝政期、ソ連期、現代、それぞれ異なる商品分類を現代ロシアでも採用していない国連の標準国際貿易分類 (SITCrev.1) にすべて置き換えるという根気のある作業を伴った労作である。これによって、1897 年から 2010 年までの長期貿易統計を提示することに成功している。本書統計編ではこれを 1 桁分類まで示しているが、付録の CD-ROM に所収されている補論 2 では、2 桁分類まで提示する念の入れようである。軍需物資関連の貿易情報の秘匿ゆえに「未分類」問題がソ連期には内在していることなど、新たな知見の学術的貢献は高い。

本書は、各章分野が独立したプロジェクトと呼べるほどに精緻にロシアの長期経済統計に取り組むだけにとどまらず、それらを積み上げて第 9 章において総括する重層的な構造をもっているところに、凄みがある。第 9 章は、他の章と較べ最も紙面を割いており、本書のクライマックスと言えよう。1950 年代まで高かった成長の勢いも 1960 年代以降に陰り、特に、財・サービスの質を鑑みた経済成長の質が、日米欧の豊かさや較べ、格差は歴然としていたこと、消費財選択・営業・貿易・旅行・為替の自由化がないまま「不足の経済」を国民に強いたことがソ連崩壊の最大の経済要因であったこと、日露の長期成長経路を比較するとロシアの日本への GDP キャッチアップは絶望的な状況にあることなど、非常に挑戦的で刺激的な討論が提示されている。ソ連時代ロシア共和国の非公式経済がロシア共和国の経済規模に寄与するとともに、実質経済成長の速度を抑制していたこと

など、現代ロシアのシャドー・エコノミーの分析も含め、示唆に富んでいる。また、第9章 Appendix は、ソ連時代の石油・ガス産業における貿易レントを含む GDP 推計を行い、現代ロシアとの比較を行う試みは、これまで試みられなかった斬新な挑戦的課題であるがゆえに、注目に値する。石油・ガス輸出に伴う資源レントは、「現代ロシアが受け継いだソ連の遺産」であり、現在も資源依存型経済を特徴とする現代ロシア経済をソ連時代から照らす意味でも、非常に興味深い。

本書を読了し、各章著者が本書のための研究に費やした膨大な時間と作業量に畏敬の念を覚える。それぞれの時期の統計概念や分類の変更や統計の欠損、秘匿など、ロシア研究で注意しなければならない統計の課題に触れることができる。もちろん、第9章で結実する帝政ロシアから現代までの長期成長経路の提示こそが本書の目指すところであり、評価されるべきところであろう。それゆえ、読者が知りたいすべての統計について隈なく説明が見いだせるわけではない。それでも、本書は、2度の体制転換を経験したことを特徴とするロシアの統計の変遷を理解するうえで、ロシアの経済統計を利用する者が常に道標とすべき必須文献であると位置づけられよう。